

特集 「絶対評価」を考える

「絶対評価」に 求められているもの

大内由香里

(東京都江戸川区立上一色中学校)

1 学期の反省から

「絶対評価」をめぐる、各学校で試行錯誤が続いていることと思う。筆者の勤務校でも、学期末は大変だった。英語科に限らず、他の教科においても「何をどう点数化し、どの観点に振り分け、さらに観点別評価をどうやって評定に換算するか」ということが問題となり、議論された。

そして、いつになく苦勞して記入した「通知表」が完成したとき、「やっぱり何かが違う」と感じた。各教科の観点別評価の欄にABCが30個以上もずらずらと並び、教科ごとの欄には54321の数字。これを見た生徒や保護者に何がわかるのだろうか？教師の苦勞は報われたのだろうか？1学期を終えた時点で筆者が思ったのは「評価に振り回されないようにしよう」ということだった。

「評価」の前にはしておくべきこと

英語教師にとって最も大切な仕事は「生徒に英語の力を付けさせること」である。したがって、何よりも「日々の授業に力を注ぐこと」を第一に考えたい。言い換えれば「教師が大切だと考えることを、生徒にも伝え、それができるように指導すること」である。評価に追われて授業がおろそかになったり、あるいは「指導せずしてテストする」ようなことがあっては本末転倒である。

「評価をすること」も教師の仕事の1つには違いないが、あくまでもその「評価」は、「生徒の英語学習を支援するものでなくてはならない」(松沢伸二『英語教師のための新しい評価法』大修館書店、2002年)。

また、授業を通じて「生徒とのよい人間関係」を築いておくことも欠かせない。これは容易なこと

ではないが、生徒の「信頼と納得」なしには、評価の意味も薄れてしまう。「絶対評価」とはいえ「絶対的な評価規準/基準」がない以上、生徒を直接指導している教師の役割と責任の重さは「絶対」である。

「評価」の後にすべきこと

「評価」を与えたら、その後の手当ても必要である。特に結果が思わしくなかった生徒に対しては、どこが不十分だったのかを伝え、場合によっては補習や授業のやり直しも考える必要がある。また、教師の方も、自らの指導や評価の方法が適切であったかどうかを振り返り、今後の指導に生かすべきである。

ペーパー・テストによる評価の留意事項

筆者個人としては、現在の4つの観点は適切ではないと考えているが、本稿に課せられた役目を果たすため、とりあえず従来のペーパー・テストのあり方を見直し、問題作成と評価の際の留意点を記すことにする。ただし紙幅の都合でポイントを示すにとどめる。もちろん、前述のように「授業あつての評価」であるから、実際には、個々のテストに先立って適切な「指導」が行われていることが前提である。

(1) テスティング・ポイントを明確にする

観点別評価を行うためには、個々の問題が「何を測ろうとしているのか」が明確でなくてはならない。そこで、問題を作る際、次のように問題番号のそばに「テストティング・ポイント」を簡単に明記する。これにより、いわゆる「総合問題」は必然的に消える。

例) 1 [is, are, amの使い分け]

次の[]にis, are, amのうち、適するものを入れなさい。

My name [1] Mukami. I [2] from Kenya. I [3] a soccer fan. [4] you a soccer fan too, Kumi? (以下略)

(2) 十分な問題数を確保する

上記のような単純な問題であれば、少なくとも10問以上は必要であろう。教科書で扱った文章そのままだと、暗記だけで正解できてしまう可能性がある。手を変え品を変え数多く問題を用意する。テストの満点が100点である必要は全くないので、気にせず必要十分な量を作成する。

(3) テスティング・ポイントに合わせて採点する

例えば、上の問題の[4]の答えは、文頭に來る語の最初の文字を大文字にしてAreと書くのが正しい。もしareと書いてしまった生徒がいたらどうするか?ここでは「is, are, amの使い分け」がポイントなので、正解とすべきである。もし「文を書くときの決まり」をテストしたければ、それをポイントにした問題を別に用意すべきである。

未然にこのような問題を防ぐために、特に入門期では「文頭にくる単語の最初の文字は大文字にすること」というような注意書きを、問題用紙にも解答用紙にも書いておくと親切である。

(4) 4つの観点との関連を考える

上の問題は、4つの観点に照らし合わせると、おそらく「言語(や文化)についての知識・理解」に入るであろう。(文化をカッコ付きにしたのは、英語という教科が担うべき範疇外だと思っただけだが、あえてここでは詳しく触れない。)問題作成の時点で、あらかじめどの観点を見るための問題なのかを考えておく必要がある。

しかし実際には、各観点の境界線を引くのは非常に難しい。「(言語や文化についての)知識・理解」と「理解の能力」との違いは何か、「理解」ができれば「表現」もできない、など矛盾は多い。現状では、教師の判断で決めるしかないだろう。

(5) ペーパー・テスト以外による評価も加える

例えば「話すこと」の「表現の能力」を測るには、

ペーパー・テストでは無理である。スピーチなどの実技テストを行うか、あるいは日常の授業中の活動を観察・記録するか、いろいろな方法が考えられる。生徒の実態に合わせて教師が決めればよい。個々のアイデアについては「NEW CROWN 評価アイデア集」を参照されたい。

(6) 生徒へのフィード・バック

「絶対評価」になったとはいえ、生徒が受け取るのは、多くの場合、ABCの記号と5段階などの数字である。確かに「英語3」という今までの表記に比べたら「言語や文化に関する知識・理解B」の方がましかもしれないが、受け取る側にとってあいまいである点では大差ない。しかも苦勞してつけた観点別評価の意味が、評定によって薄らいでしまう。

筆者は、定期テストを返却する際、テストとともに次のような「評価表」を生徒に渡している。紙幅の都合上、実物を載せることはできないが、おおむね次のようなものと考えていただきたい。

まずテストの問題番号とテスト・ポイント(例えば「is, are, amの使い分け」)を記し、大問ごとの配点を記入しておく。そこに各生徒の得点を記入していく。10点中7点だった生徒の場合は7/10と記入される。到達目標に合わせてABCを付けてもよい。最後に、教師のコメントを文章で記す欄を設け、頑張った点、努力すべき点などについて一言添える。いわば、簡単な「英語科の通知表」と考えてよい。筆者は「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」を点数化することに疑問を感じているので、特にこの点についての記述を必ず盛り込むようにしている。

おわりに

実は「絶対評価」に一番求められているのは、「教師のこぼれによるコメントや叱咤激励なのではないか」と感じはじめて今日この頃である。「A」をつけることより、あるいは「評価表」に「音読が上手」と書くよりも、授業中の「今の発音、すごくよかったね!」という教師の一言の方が何倍も大切なのではないだろうか。